

# 社会科学教育に関する教材の研究 ——新検定教科書と現行学習指導要領との比較から——

辻 浩 和\*

## A Study of Social Studies Textbooks A Comparison of New Textbooks with the Current Course of Study

Hirokazu TSUJI

### 要 旨

2016年度より新しい中学校社会科教科書の使用が開始される。そこで本稿では、東京書籍、帝国書院、教育出版の3社の教科書に関して、旧版と新版の比較分析を行い、現行学習指導要領への準拠度合いと、教材としての発展について考察した。分析にあたっては、対象を歴史的分野の前近代部分に限り、安定して大きなシェアを持つ3社の教科書に限定した。3社に共通する傾向として、①導入—まとめのプロセス、特に生徒自身が学習内容を説明する力を重視した改訂を行っており、また②各時代のまとめやコラム欄において、発展的学習に関する記述が充実している。したがって、今後新版を利用するにあたっては、学習課題を着実に身に付けさせる毎授業時間のとりくみと、時代を大観して考えさせるような発展的学習への教員独自の工夫という、タイプの異なる2種類の指導が要求されている。両者をいかに組み合わせるかによって、授業のバリエーションを豊かに広げていくことが可能であり、教員の授業計画・構成がこれまで以上に重要になってくることを指摘した。

キーワード：学習指導要領、社会科学教育法、東京書籍、帝国書院、教育出版

### はじめに

2014年度の検定を経て、2016年度より新しい中学校社会科教科書の使用が開始される。今次検定は、2008年3月28日に学習指導要領が改訂されてから2度目の検定にあたるが、以下

---

\*講師 日本中世史

の2点によって社会的な注目を集めるに至った。

(1) 検定に先立って検定基準の見直しが行われ、①「未確定な時事的事象」について特定の事柄を強調し過ぎることへの配慮、②「近現代の歴史的事象のうち、通説的な見解がない数字などの事項」についての配慮、③政府見解への準拠などが求められた点<sup>1</sup>。

(2) 検定に先立って「中学校学習指導要領解説」の一部改訂がなされ、①領土に関する教育、②自然災害における関係機関の役割等に関する教育の充実が求められた点。例えば歴史的分野においては、「明治期に我が国が国際法上正当な根拠に基づき竹島、尖閣諸島を正式に領土に編入した経緯に触れること」が明記された<sup>2</sup>。

これらはいずれも現代の政治と密接に関連する問題であるだけに、新聞やインターネットなど様々なメディアで激しい議論を引き起こした。特に2015年度の教科書採択をめぐることは、学び舎や、育鵬社、自由社などの教科書を中心に、様々な団体によって研究会や反対集会が繰り広げられた。こうした点が、政治と歴史教育との関係をめぐって大変重大な問題を提起しており、今次検定において最も注目すべき点であることは間違いがない。

その一方で、あまり注目されていないが、今次の検定教科書では上記の点以外にも多くの改訂がなされている。特に各社教科書に共通する改訂ポイントとして、調べ学習や学習内容の言語化・ディスカッションに関わる記述や、地域文化に関する記述の充実が挙げられよう。2008年の学習指導要領改訂の要点が、「基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得」に加えて、「言語活動の充実」「社会参画、様々な伝統や文化、宗教に関する学習」を重視する点にあったことを想起すれば<sup>3</sup>、今次検定教科書は、現行学習指導要領へのさらなる準拠を図っているといえるのである。このことは、教科書が漸次的に変化していくものであることを踏まえればごく当然のことではあるが、前述のように今次検定教科書の特異点が強調されている現状では、教材としての着実な発展過程がかえって見過ごされがちであるといえよう。

そこで本稿では、記述内容そのものの変更が大きく、また多くの言説が飛び交う近現代からいったん離れ、前近代における今次検定教科書の変更点を探ってみたい。前近代部分においては、記述内容そのものの変更が少ない分、言語活動や伝統・文化教育を充実させるための工夫に意が注がれているためである。現行学習指導要領は、「言語活動の充実」など指導法そのものに関わる変更を個々の教員に迫っており、そのノウハウの構築と定着にはなお試行錯誤が続いている状況と思われる。2度に亘る検定を経て、それぞれの教科書が指導マニュアルとしてどのように発展しているのかを把握することは、それをを用いる教員側のノウハウ構築にとっても有用であろう。

なお本稿では、紙幅の関係から、分析対象を歴史的分野の前近代部分に限り、安定して大き

なシェアを持つ東京書籍、帝国書院、教育出版の3社を扱うこととする。

## 第1章 歴史的分野における現行学習指導要領の要点

まず、新検定教科書の前提となる、現行学習指導要領の内容について確認しておく。『中学校学習指導要領解説 社会編』（以下『解説』と略記する）によれば、歴史的分野における現行学習指導要領の要点は下記の5点にまとめられる<sup>4</sup>。

### ア. 「我が国の歴史の大きな流れ」を理解する学習の一層の重視

歴史の大きな流れを理解するために、学習内容の構造化が図られる一方、中項目では「AがBであったことを理解させる」といった形で学習の焦点が明確化され、大項目では学習内容を比較し、関連付け、総合した上で各時代の特色を表現させるなど、「より深く確かな理解」が重視されている。

### イ. 歴史について考察する力や説明する力の育成

時代の転換の様子、時代区分やその移り変わりについて考察させ、自分の言葉で表現させることを通して、「歴史について考察する力や説明する力」を育てるとされている。そのために、学習の初めに課題意識を育て、ねらいを明確に意識させるための「導入」と、学習の成果を確かにつかませるための「まとめ」が重視されており、「その工夫と充実が図られる必要がある」という。例えば時代区分やその移り変わりに気付く学習は全体の「導入」として、各時代の特色をとらえる学習は各時代の「まとめ」として位置づけられる。

### ウ. 近現代の学習の一層の重視

単一の大項目であった近現代を、近代と現代の二つの大項目に分ける一方、学習事項の増大や詳細化は行わず、事例の具体化や、思考・表現の重視などの工夫を重視している。

### エ. 様々な伝統や文化の学習の重視

従来の取り組みに加えて、「身近な地域の歴史を調べる活動」および「各時代の文化をはじめとする学習において、伝統や文化の特色の理解につながるような学習内容」が重視されている。

### オ. 我が国の歴史の背景となる世界の歴史の扱いの充実

世界の古代文明や宗教の起こりなどに関する学習の充実が図られ、また特に国際関係が重きを占める近現代において、日本の歴史と世界の動きの関連付けが重視されている。

では、現行学習指導要領が重視する以上の点は、各社の新検定教科書においてどのような形で実現が目ざされているのだろうか。次章以降で具体的に見ていきたい。

## 第2章 東京書籍『新しい社会 歴史』の分析

## 第1節 構成上の変更点

東京書籍発行の『新しい社会 歴史』は、旧版が263ページであったのに対し、新版は287ページとなっており、24ページに及ぶページ数の増加が見られる。これは、図版が全体的に大きくなったこととも関係しているように、基本的には目次構成の変更によるものと考えられる。各章のページ数を比較すると、下記の表ようになる（巻頭・巻末付録は除外した）。

	旧版ページ数	新版ページ数
第1章（導入）	5～16ページ（計12ページ）	5～18ページ（計14ページ）
第2章（古代）	17～56ページ（計40ページ）	19～62ページ（計44ページ）
第3章（中世）	57～88ページ（計32ページ）	63～96ページ（計34ページ）
第4章（近世）	89～130ページ（計42ページ）	97～140ページ（計44ページ）
第5章（近代）	131～180ページ（計50ページ）	141～194ページ（計54ページ）
第6章（戦前）	181～222ページ（計42ページ）	195～238ページ（計44ページ）
第7章（戦後）	223～253ページ（計31ページ）	239～275ページ（計37ページ）

各章で少しずつページ数の増加が見られるが、特に目立つのは古代、近代の4ページ増、戦後の6ページ増である。各章の変化とその要因を、順に見ていこう。

まず第1章「歴史のとらえ方」では、旧版が全3項で構成され、小学校で学習した内容の大観と時代・年代表記の説明、調べ学習の方法提示等が行われていたのに対して、新版では第1項に「身近なものにも歴史がある!？」と題して年中行事についての項目が追加されている。学習指導要領を見ると、この章では、小学校の学習を踏まえつつ、①我が国の歴史上の人物や出来事などについて調べたり考えたりするなどの活動、②「身近な地域の歴史を調べる活動」、③「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動」、の3つが要求されている<sup>5</sup>。旧版では、このうち①と③には注意が払われていたものの、②については対応する記載が比較的少なかった。新版で年中行事が取り上げられるようになったのは、この点を改善し、「地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫すること」とした学習指導要領（内容の取扱い）<sup>6</sup>に、より準拠した形に改めたものと考えられる。一番初めにこの項目が置かれているのは、身近な事象を通して生徒の関心を喚起するという意図によるものだろう。

第2章「古代までの日本」では、先史時代～古墳時代の構成が大幅に変わっている。旧版は全2節構成だったが、そのうち1節「文明のおこりと日本の成り立ち」(20～33ページ、計14ページ)となっていた部分が、新版では1節「世界の古代文明と宗教のおこり」(22～31ページ)、2節「日本列島の誕生と大陸との交流」(32～37ページ)の2節に分かれ(計16ページ)、結果第2章は全3節構成に変化した。旧版の第2章1節は「1. 世界の古代文明と宗教のおこり」の項目がもともとかなり長く、コラム「深めよう ヨーロッパの古代文明とイスラム教」を含めると8ページにも及んでいたので、新版ではこの部分を第1節として独立させ、増補した形になる。これは、中項目のねらいが「世界の各地で文明が築かれ、東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったこと」の理解におかれているため<sup>7</sup>、1節を前半部分に、2節を後半部分に対応させることで、明確化を図ったものと思われる。

2ページ分の増加は図版の増加による部分が大きく、記述自体にそう大きな変更があるわけではないが、いくつか注目される点が存在する。まず、中国文明について、儒教や秦・漢の政治史などに関する記述がやや詳細化した。これは「中国の文明を中心に」という学習指導要領(内容の取扱い)に準じた措置といえる。

また、旧版では「文明の発展」と「宗教のおこり」を取り上げたあと、コラムでギリシャ・ローマの文明とキリスト教・イスラム教の「広がり」を扱うといったように、文明と宗教との連関を時代順に2分して見ていく構成になっていた。これは、文明と宗教との地域的重なりを重視する学習指導要領(内容の取扱い)を意識したものと考えられる。一方新版では、「2. 古代文明のおこりと発展」「3. 中国文明の発展」「4. ギリシャ・ローマの文明」と各文明を時代順に学んだ後で、「5. 宗教のおこりと三大宗教」によって宗教を学ぶ構成に変化している。三大宗教については教義中心に記述の増補が見られる一方で、やや下った時代を扱っていた「広がり」の部分については捨象された。全体を文明と宗教とに大きく括り直し、かつ「おこり」に関係ない宗教の展開過程を削ることで、「世界の古代文明や宗教のおこり」という学習指導要領の記述に逐条的に沿う構成を目指し、学習内容の焦点化を図ったものであろう。ただ、項目が分かれてしまった分、「仏教、キリスト教、イスラム教などを取り上げ、世界の文明地域との重なり気付かせるようにする」ためには、教員による示唆・誘導が重要になってくる。

第3章「中世の日本」では、1節「武士の台頭と鎌倉幕府」に「3. 鎌倉幕府の成立と執権政治」が追加され、全4項目から全5項目に増加した。学習指導要領にある「鎌倉幕府の成立、南北朝の争乱と室町幕府、東アジアの国際関係、応仁の乱後の社会的な変動」<sup>8</sup>に対応して、鎌倉幕府の成立を独立項目としたものと推察される。これに伴って各項目のレイアウトが変化している。記述面では、奥州藤原氏や荘園の仕組み、保元・平治の乱の影響、源平の争乱などの記

述が若干増えた。

第4章「近世の日本」では、3節「産業の発達と幕府政治の動き」のうち、旧版で「2. 都市の繁栄と元禄文化」とされていた部分が「2. 交通路の整備と都市の繁栄」「3. 幕府政治の安定と元禄文化」に分けられ、全6項目から全7項目に増加した。「1. 農業や諸産業の発達」では商品作物に関する記述が、「2. 交通路の整備と都市の繁栄」でも交通路に関する記述が具体化・充実化している。学習指導要領（内容の取扱い）に「『産業や交通の発達』については、身近な地域の特色を生かすようにすること」<sup>9</sup>とある点に対応し、地域との関わりを学習しやすくしたものだろう。なお、「3. 幕府政治の安定と元禄文化」において「綱吉の政治と正徳の治」が新設されている。

第5章「開国と近代日本の歩み」では、1節「欧米の進出と日本の開国」において4ページ分の増加が見られる。この増加は、旧版「2. 産業革命と欧米諸国」が「2. 産業革命と19世紀のヨーロッパ」「3. ロシアとアメリカの発展」の2つに分離し、「6. 尊王攘夷運動と開国の影響」が新設されたことによるものである。前者は旧版の構成を組み替え、産業革命に関する記述を増強したもの、後者は、『解説』に「幕府が対外政策を転換して開国したことと、その政治的及び社会的な影響を理解させ、それが明治維新の動きを生み出したことに気付かせる」<sup>10</sup>とある点に対応した増補で、開国とその政治的影響との繋がりをわかりやすくする意図があるものと思われる。

第6章「二度の政界大戦と日本」では、2節「世界恐慌と日本の中国侵略」のうち旧版「2. 欧米の情勢と日本」が「2. 欧米の情勢とファシズム」「3. 昭和恐慌と政党内閣の危機」に分かれた結果、2ページ分の増加が見られる。

第7章「現代の日本と世界」では、1節「戦後日本の発展と国際社会」に「7. マスメディアと現代の文化」が新設されたほか、一般的に記述が増加している。

このように、新版では、学習指導要領の記述に対応して項目を独立させるなど、より学習指導要領を意識した構成になっている。また、近代と現代で大幅な記述増が見られる点も、「近現代の学習の一層の重視」という方針（第1章前述）に則った変更といえるだろう。

## 第2節 教育上の工夫に関する変更点

本節では、本文記述以外の欄外記述やコラムなど、本文の学習を補助するための教科書の工夫について取り上げる。新版では特に「導入」と「まとめ」に関する工夫が見られるので、この点に絞って述べたい。こうした工夫は、第1章で述べた通り、新学習指導要領が導入とまとめのプロセスを重視していることによるものだろう。

(1) 各項目の導入とまとめに関して

東京書籍版では、従来から問いかけの形で各項目ごとのねらいを記載していたが、新学習指導要領への移行に伴って、各項目の終わりに振り返り学習のコーナーが新設された。この点は今回の新版でも踏襲されているが、旧版に比べ、「説明しましょう」という形での振り返り学習がかなり増えている。

例えば、桃山文化の項目では、旧版が「桃山文化の特色を考え、下の□□に10字程度の言葉を入れましょう。『□□文化』という問いかけだったのに対して、新版では「桃山文化の特色を次の二つの点からそれぞれ20字程度で説明しましょう。①にない手になった人々、②外国の影響」という問いかけに変わっている。着目点を示すかわりに、字数が増加しており、同時に、本文の単純な抜書きでは対応できない形になっている。これは、「説明する力」(第1章前述)を重視し、学習指導要領の意図により一層沿うための変更といえよう。

また、「導入」と「まとめ」の対応関係についても意識した形跡が見受けられる。例えば、武士の成長の項目について、旧版は「武士はどのようにしておこり、力をのばしていったのでしょうか」→「次の戦乱の結果を、それぞれ説明しましょう。①平将門・藤原純友の乱、②前九年合戦・後三年合戦、③保元の乱・平治の乱」となっていて、導入と振り返りの対応関係はさほど明確ではなかった。これに対して新版では、「武士はどのように成長していったのでしょうか」→「次の出来事の結果、武士がどのように成長していったか、それぞれ20字程度で説明しましょう。①平将門・藤原純友の乱、②前九年合戦・後三年合戦」となっており、両者の対応関係は明確化している。

以上のように、新版では説明すべきポイントや分量を明確に示す傾向があり、生徒の立場に立てば、何の説明を求められているのかが分かりやすくなっているといえるだろう。

(2) 各時代のまとめに関して

導入とまとめのプロセスは、各項目だけではなく、大項目(時代区分)においても重視されている。ここでは特に各時代のまとめを取り上げる。東京書籍版では、各時代の最後に「この時代の特色をとらえよう」「この時代の歴史の学習を確認しよう」(旧版では「この時代の学習をふり返って、みんなで考えてみよう」というコーナーを設けている。このコーナーについても、いくつか注目すべき変更点があるので紹介したい。

中世のまとめとして、旧版では①「中世の政治、外交、社会、文化の中から、中世の特色をあらわすテーマ」を考えさせ、②テーマに沿った絵や写真を選ばせ、③それぞれの絵や写真を文章で説明させる、という形をとっていた。これは「文献や絵図、地図、統計など」「様々な史料を活用して歴史的な事象を多面的・多角的に考察」<sup>11</sup>することを目指したものと推察される

が、しかし、図版から時代相を読み取るためには、キャプションに書かれている以上に図版をよく理解することが必要であり、教員にとっても生徒にとってもかなり難易度が高い。また、モニター等がない教室においては、図版を活用する上でも困難があったと思われる。これに対して新版では、政治・社会・外交・文化の各項目について、「前の時代」と「学習した時代」との「比較表」を作成させる形に変わっている。これにより、より現実的なレベルのまとめ学習が可能になった。と同時に、「二つの時代を比較することで時代の動きを大きくとらえてみましょう」という記述が示す通り、「歴史の大きな流れ」や「時代の転換の様子」（ともに第1章前述）を明確に意識させることができる。学習指導要領への準拠を深めるとともに、教材としても大きな改善が図られている。

近世のまとめとして、旧版の「この時代の特色をとらえよう」では「印象に残っているできごとや、時代を大きく動かすきっかけとなったできごと」を「歴史新聞」にまとめることが求められていた。「読み手にわかりやすい紙面」への配慮に、説明する力の涵養を意図していることがうかがえる。ただ、新聞作りには時間やコストがかかる上、「おたがいに読み合」うだけではフィードバックが不十分になる可能性があった。これに対して新版では、「『ディスカッション』をしてまとめよう」という形に変更されている。そこでは、最も活躍したと思う人物を1人挙げさせ、その人がどのような身分の人だったかに着目させる。同じ考えの人でグループを作らせ、もっとも活躍したと思う理由をまとめさせた上で、ディスカッションを行う。質疑を踏まえ、最後にもう一度自分の考えと時代の特色をまとめさせる。以上の一連の過程において、生徒は自分とは異なる考えの他者を説得するために、自説をわかりやすく整理し、再検討する必要に迫られる。「思考・判断や表現などの過程を通じて、学習内容についての理解や認識を一層深める学習」<sup>12</sup>として改善が図られているといえよう。

また、近世の「この時代の歴史の学習を確認しよう」では、「③江戸幕府は、全国を支配するうえでどのような工夫を行っていたのでしょうか」「④年表を基に『貨幣経済の広がり』『貧富の差の拡大』『百姓一揆・打ちこわし』などが見られるようになった後、『政治』ではどのような動きが起こっていったのかぬき出しましょう」など、中項目のねらい<sup>13</sup>に直結するような問いや、社会と政治との関わりを立体的に捉えるような問いが設定されている。「印象に残ったできごと」中心だった旧版に比べると、より具体的かつ誘導的な問いかけになっており、学習内容の理解・定着を深める方向で改善がなされているといえるだろう。

以上のように、新版では導入とまとめの部分にかなり手が加えられている。各項目においても、各時代においても、「説明する力」の育成が意識されており、説明を求める分量を増やす一方で、説明すべきポイントが具体的にわかるように明確な指示を与える傾向がある。多様な

意見が出にくくなるというデメリットはあるものの、学習内容の「まとめ」という観点からは評価できよう。

### 第3章 帝国書院『中学生の歴史』の分析

#### 第1節 構成上の変更点

帝国書院版は、今回からサイズがワイド化した。ページ数は旧版が266ページ、新版が268ページでほぼ変わらないが、全体的に文字数が増え、論旨を変えない範囲で少しずつ情報量が増やされている。

構成上の変化としてもっとも顕著な変化は、文化に関するページ数の増加であろう。旧版では各時代の文化についてそれぞれ2ページがあてられていたが、新版では元禄文化を除いていずれも4ページに増加している。天平文化では神話の話題が詳細化し、諸国神話との類似にも注意が向けられている。平安文化は仏教について、鎌倉文化はいわゆる新仏教についての説明が充実した。室町文化は、旧版の「4. 庶民生活の大きな変化」が「4. 庶民に広がる室町文化」と改題され、生活から文化へと叙述の重点が変化した。「地域史」コラムでは「北海道の独自の文化」も取り上げられている。安土桃山文化は商業の発展、朝鮮から伝わった文化、今を楽しむ庶民、などの記述が増加している。元禄文化は変化なしだが、旧版「3. 外国船の接近と幕府の衰退」が近代に移行し、旧版「4. 新しい学問と教育の広まり」が繰り上げられて新版「3. 江戸の庶民が担った化政文化」と改題された。

その他の変化として、第1部が旧版の2～6ページから2～10ページに増加した点が挙げられる。すなわち、旧版では第1部「歴史の流れと時代区分」が

- 1章 おもしろ歴史発見！
  - 1. 歴史人物カードを使ってみよう
  - 2. 時代の移り変わりと時代区分
  - 3. 地域調査に出かけてみよう

という1章構成だったのに対し、新版では第1部を「歴史のとらえ方と調べ方」と改題し、

- 1章 歴史の流れと時代区分
  - 1. 時代の移り変わりと時代区分
- 2章 歴史の調べ方 まとめ、発表の仕方
  - 1. 調べるテーマを決めよう
  - 2. 情報を集めて調べよう

### 3. 結果をまとめて発表しよう

という2章構成になっている。1章部分では、小学校の学習の復習にあてられていた「歴史人物カード」が廃止され、表紙見開きの「歴史をたどろう」として簡略化された。その代わりに、西暦・世紀・元号・時代についての練習問題が入り、原始～現代の時代観・時代像をおおまかに解説するなど、時代の大きな流れを意識させることに、より注力している印象がある。2章部分がかなり充実しているが、これは基本的に旧版で巻末に載せられていた「地域調査・まとめ発表マニュアル」を第1部に組込んだもので、学習指導要領が「(1) 歴史のとらえ方」の「内容」に「身近な地域の歴史を調べる活動」を含めている点を意識した構成変更と言えるだろう<sup>14</sup>。

第2部1章「3. 東アジアに生まれた文明」「4. 宗教の誕生と広まり」が「3. 東・南アジアでの文明の広がり」「4. ヨーロッパで芽生えた文明」になっている。文明と宗教とで分けていた構成を、地域別に再構成したものである。

第2部2章は「1. 稲作による生活の変化」が「1. 縄文から弥生への変化」に変更されている。これは、近年の発掘成果によって、稲作の伝播過程や時代区分に諸説が生じている研究状況<sup>15</sup>を反映した変化であろう。これにともない、旧版では次項に載せられていた「日本列島全体にいつせいに稲作が広まったわけではなく、縄文時代と変わらない狩りや漁の生活を続けていた地域もありました」という記述が、本項目に編入されている。

第3部2章「2. 後醍醐天皇の挑戦と新たな幕府」「3. 東アジアの新体制と倭寇」が、「2. 南北朝の内乱と新たな幕府」「3. 東アジアの交易と倭寇」に変わっている。

第3部3章「2. 民衆による自力救済」「4. 庶民生活の大きな変化」が「2. 団結して自立する民衆」「4. 庶民に広がる室町文化」にそれぞれ改題された。

第3部5章「3. 外国船の接近と幕府の衰退」「4. 新しい学問と教育の広まり」は「3. 江戸の庶民が担った化政文化」として1つにまとめられた。

このように、古代～近世までの構成は基本的に変化が少なく、タイトルの小改訂にとどまった。一方、近現代では各章の項目が整理されて節が少なくなり、かなり構成が変わっているが、本稿では省略する。

## 第2節 教育上の工夫に関する変更点

本節では、本文記述以外の欄外記述やコラムなど、本文の学習を補助するための教科書の工夫について取り上げる。帝国書院版でも「導入」と「まとめ」のプロセスは重視されているが、新版ではむしろコラムなど独自のコーナーの改訂が顕著に見受けられる。

### (1) 各項目の導入とまとめに関して

各項目において、「◆」で示されていた導入が「学習課題」と明記され、まとめ部分は「チェック&トライ」から「確認しよう」「説明しよう」に変化するなど、学習指導要領との対応やそれぞれの記述の求める内容が明確化している。

例えば第2部3章「2. 律令国家をめざして」は、旧版で「◆倭（日本）は律令を取り入れることで、どのような国家をつくろうとしたのでしょうか」という導入に対して、「チェック：大宝律令によってどのようなしくみが生まれたのか、本文から探してみましょう」「トライ：平城京やそのほかの都が、どのような地形の場所に作られたのか、地図帳で確認してみましょう」というまとめがついていた。「チェック」については、「どのような国家」と「どのようなしくみ」とでズレが見られるものの、基本的には「◆」と対応した内容になっている。一方で「トライ」については、副教材の存在を前提として地形を読み取る技術が必要であり、本文記述とは大きく離れた発展的学習を要求する内容であった。これに対して新版では、以下のように変えられている。「学習課題：東アジア諸国との関係のなかで倭（日本）はどのような改革を進めたのでしょうか」という導入に対して、「確認しよう」では「天智天皇と天武天皇が行った改革を本文から書き出してみましょう」と対応関係が明確化された。「説明しよう」も、「戸籍と大宝律令によって図のしくみはどのように変化したか説明しましょう」といったように、あくまで本文記述に関連した内容、かつ中央集権化という主題に即した問いかけになっている<sup>16</sup>。

また、第3部1章「3. 鎌倉を中心とした武家政権」において、旧版では「◆鎌倉を中心とした武家政権は、どのようなしくみによって各地の武士を支配したのでしょうか。」「チェック：御恩と奉公についての説明を本文から探して、その関係を図にしてみましょう。」が武士の主従関係を問題にしているのに対して、「トライ」は「承久の乱が起こったとき、次の人たちが考えたことを、推理してみましょう。朝廷／西国の武士／東国の武士」と、全く異なる内容となっている。本文の記述のみによって「トライ」に答えるのはかなり困難であり、教員による補足説明を前提としたものと考えられる。これに対して新版では、「学習課題：鎌倉を中心とした武家政権はどのような特徴を持っていたのでしょうか」「確認しよう：幕府と御家人の主従関係を示す二つの言葉を本文から書き出してみましょう」「説明しよう：御家人にとって守護や地頭に任じられることが大切だった理由を説明してみましょう」となっており、全体が主従関係という主題に即した問いかけとなっている。

このように、新版では各項目のまとめ（確認・説明）が学習課題に即して設定されており、導入とまとめのプロセスの一体性が高まっていると言えるだろう。

## (2) 各時代のまとめに関して

旧版で各時代の最後に置かれていた「学習のまとめ」は、「チェック」「トライ」「言語活動」の3つから構成されていたが、新版の「学習をふりかえろう」ではこれらが「確認しよう」「説明しよう」の2つに再編成されている。旧版では学習指導要領の「歴史について考察する力や説明する力」に忠実に従い、「トライ」（問題文：考えてみよう！）と「言語活動」（問題文：説明してみよう！）の2つを設けていたが、新版ではより「自分の言葉で表現」し、「説明する力」に力点が置かれていると言えるだろう。実際の授業に即して考えるならば、「考えてみよう！」は言語的な説明として表現される必要があるもので、より現実に即した構成になっている。

## (3) コラム等に関して

新版ではコラム欄に関する改訂が目立つ。

例えば、旧版では「歴史の舞台」というコラムが9箇所設けられ、「地域の歴史や交流の歴史など、本文で扱った内容をより具体的な例をあげて紹介したページです」と説明されていた。これらの一部は、新版では「歴史を探ろう」というコラムに編入され、11箇所に増補が図られている<sup>17</sup>。その内容も「学習したことを具体例を通じてさらに深めるページです」と説明されており、旧版の「紹介」に比べると、発展的学習としての位置づけが明確化された。実際に、新版では学習者への問題提起や問いかけを増やし、より丁寧な誘導が図られている。

新旧で共通して取り上げられている江戸の都市生活を例にとれば、旧版ではイラストの吹き出しで「江戸ってどのような町だったのかな」という漠然とした問いかけがなされるのみであった。これに対して新版では、「当時、百万人をこえる人々が住む世界有数の大都市だった江戸は、どのようにしてこのような大きな都市へと発展していったのかな。また、これほど多くの人々が住んでいた江戸の生活環境は、どうなっていたのかな」として、より具体的かつ体系的な問いかけがなされており、文章説明も増加している。「おもな関連事項と関連ページ」が示されている点にも、学習者への配慮と工夫が感じられる。

発展学習としての位置づけは、新出の内容にも看取される。蒙古襲来の直後に新たに置かれた「歴史を探ろう：東アジアに開かれた窓口博多」でも、「博多を中心とする地域は、古代には大宰府がおかれ、中世には元軍が攻めてくるなど、政治でも、外交でも重要な場所でした。でも、どうしてほかの土地ではなく博多が重要だったのかな。また、博多に集まる人々はどうのような暮らしをしていたのかな」として、「①どうしてこの地域が重要だったのかな。②古代や中世の博多はどのような都市だったのかな。③幕府にとってどれくらい重要な都市だったのかな。④博多ではどんな暮らしをしていたのかな。」といった4つの問いかけを行っている。

マクロからミクロまで様々なレベルで博多を立体的に捉えさせようとしているが、古代・中世で学習した博多の役割を想起させ、地政学的重要性についての認識を深める点に焦点が絞られているので、体系的な印象を与えるものになっている。

なお、旧版の「歴史に挑戦」は、新版の「トライアル歴史」に編入され、「意見をまとめたり、話し合ったりして、学習したことをさらに深めるページです」と説明されている。旧版・新版はいずれも資料をもとに仮説を立てたり情報を整理したりしながら考えさせるという点で共通し、発展的学習と位置付けられるのだが、旧版が6箇所あったのに比べると新版で2箇所に減少しており、この点ではやや後退していると言えるかもしれない。

地域史に関するコラムの増加も特筆される。帝国書院版では「地域史」というコラムが設けられているが、旧版におけるその数は、前近代で13箇所、近代で2箇所、計15箇所であった。これに対し、新版では前近代が12箇所、近代が10箇所、計22箇所と大幅に増加した。旧版のコラムが「国際」「地域史」「技能をみがく」「今とのつながり」の4つで構成されていたのに対して、新版では「自然環境」「人権」「交流」「平和」の4コラムを基本とし、これとは別に「技能をみがく」「地域史」「人物コラム」などが立項されるなど、コラム項目の再編が見られるため、コラム数の比較のみを単純に比較することは適当でないが、近代以降の「地域史」が2箇所から10箇所に増えた点は、意識的に充実を図ったものとみなされる。

以上のように、新版においては導入—まとめのプロセス、発展的学習、地域史等に関して、充実が図られている。

## 第4章 教育出版『中学生社会 歴史 未来をひらく』の分析

### 第1節 構成上の変更点

教育出版版は、新版からサイズが大きくなりワイド化した。これに伴って各ページのレイアウトも変更になっているが、各項目のタイトルや中身について大きな変更はないようである。

構成上最も大きく変わったのは、第1章「歴史の移り変わりを考えよう」で、旧版が4～6ページだったのに対し、新版では6～14ページになり、分量が約3倍に増加した。本章は学習指導要領における大項目(1)「歴史のとらえ方」のうち、特に中項目(ア)「我が国の歴史上の人物や出来事などについて調べたり考えたりするなどの活動」に重点をおいた章である。「内容の取扱い」で「小学校での学習を踏まえ、扱う内容や活動の仕方を工夫して、『時代の区分やその移り変わり』に気付かせるようにすること」とある通り<sup>18</sup>、「小学校で学習した歴史上の人物」をカード化して、それぞれの時代に当てはめる作業が課されている。旧版では作業

の指針だけを漠然と示しており、細部については教員の裁量に委ねる傾向が強かった。これに対して新版では、歴史的人物を生まれた時代でチーム分けし、一部の人物についてはチームへの分類（ふりわけ）をさせるなど、作業の具体化が行われている。また、「時代の分け方・年表の見方」も大きくなり、「チーム」との関連付けが図られている。ページ数が大幅増加した分、ビジュアル面も充実しており、6～10ページでくらしの様子などが示されている。

第1章では、11～14ページに「歴史にアプローチ～干支や単位、資料を活用しよう」が新設されており、これもページ数増加に関わっている。その内容は、①年代・時刻・方角の表し方と干支、②歴史のなかの単位、③絵画史料の見方、④系図の読み方、⑤歴史のなかの植物の5つから成っている。①・②には「現在はあまり使われなくなった干支や単位などに会うことでしょう」、③・④には「絵や図などのさまざまな資料も、重要な情報源となります」といった説明が付されており、これらは教科書を読み進める上での前提知識を提供している。いずれも初学者にとっては重要な情報であり、当然必要に応じて教員から説明がなされているであろうが、多くの場合、体系的に教えることはなされていないのが現状であろう。学習のはじめにこうした情報がまとめられている点は、学習への導入という点で高く評価される。⑤は、旧版のコラム「歴史のなかの農作物」を簡略化したもので、読み物的な内容になっている。

その他、以下の諸点にも変更が見られる。

第2章1・2の項目配列が変更された。旧版では、①生きぬく知恵、②骨に刻まれた文字、③エジプトはナイルの賜物、④日本列島のあけぼの、コラム「地球の歴史をたどって」、⑤東と西をつなぐ道、⑥楽浪の海中に倭人あり、⑦東アジアのなかの大和政権、コラム「地域の遺跡や古墳を訪ねて」となっていたが、新版では①、③、②、⑤、④、⑥、⑦、コラム「地域の遺跡や古墳を訪ねて」という構成になっている。おそらく、学習指導要領が「世界の文明地域」を重視していることに合わせて<sup>19</sup>、メソポタミア（①・③）→東アジア（②・⑤）→日本（④・⑥・⑦）という地域的なまとまりを重視した変更と思われる。

第4章の「1. 結びつく世界との出会い」に「教会と『コーラン』の教え」が追加された。これは旧版第3章の50～51ページにあったコラム「中世のキリスト教とイスラム教」がほぼそのままの形で項目に格上げされたものである。旧版ではモンゴル帝国の話題と武士の話題に挟まれていたが、新版でルネッサンス・宗教改革・大航海時代などと同じ括りに編入されたことは、つながりの面からいっても適正であろう。

旧版第4章のコラム「江戸時代の産業と交通」は、巻末の付録となった。また、巻末には「世界地図の歴史」が新設され、紀元前～江戸時代までの世界地図が載せられるなど、巻末付録の充実化が見られる。

## 第2節 教育上の工夫に関する変更点

### (1) 各項目の導入とまとめに関して

旧版では、学習課題が左欄外に四角囲みで示され、項目ごとのまとめとしては「トライ！」のコーナーが設けられていた。「トライ！」には2つの設問があり、「←」は「この時間で学習したことを整理したり、表現したりしてみましょう」、「→」は「さらに学習を広げたり、深めたりするときに挑戦してみましょう」という説明があった。実際の記述においては、「←」で「説明しよう」、「→」で「調べてみよう」となっており、前者が「説明する力」、後者が発展的学習に対応した設問と位置付けられる。

これに対して新版では、導入が「学習課題」という言葉を明記した上でタイトルの下にまとめられた。また、まとめとしての「ふりかえる」では、「ステップ1」「ステップ2」という2段階が設けられ、前者が「この時間で学習したことを振り返って確認しましょう」、ステップ2では「学習したことを活用して表現しましょう」となっている。実際の記述では「ステップ1」が「確かめよう」、「ステップ2」が「説明しよう」となっており、前者が学習内容を確認し定着させるための「まとめ」、後者が「説明する力」に相当する。これら2つのステップは「学習課題」と対応しており、導入→まとめのプロセスはより一体的なものとして強化されているといえよう。

例えば第2章3-⑩「律令国家への歩み」では、「大化の改新をきっかけに、国家のしくみはどのように変わっていったのでしょうか」という「学習課題」に対して、「ステップ1：大化の改新で、朝廷が目ざしたことを確かめよう」「ステップ2：律令国家の成立により、中央と地方ではそれぞれどのような仕組みで政治が進められるようになったか説明しよう」という問いが設けられている。

第3章1-④「御家人は団結せよ」では、「武家政治は、どのように広まっていったのでしょうか」という「学習課題」に対して、「ステップ1：後鳥羽上皇が、承久の乱を起こしたきっかけや目的を確かめよう」「ステップ2：承久の乱ののち、鎌倉幕府はどのように支配を広げたか説明しよう」との問いが設けられている。

いずれの場合も、1・2は単に難易度順に並んでいるのみならず、時系列順に構成されているので、これらに順番に答えることで、「学習課題」への解答が用意される。このように、新版では発展的学習よりも、導入とまとめの対応関係を重視しており、学習内容が生徒に定着することを目指しているといえるだろう。

### (2) 各時代のまとめに関して

時代ごとのまとめに関しては、特筆すべき変化がない。

多少変わった点としては、中世の「学習のまとめと表現」で、旧版に載せられていた鎌倉幕府の主従関係を示す概念図が、新版では幕府・朝廷双方を視野に入れた概念図に変わっている。また近世の「学習のまとめと表現」で、絵画史料の読み解きに替えて、「江戸幕府のしくみと中世の武家政治のしくみの共通点や違いについて説明しよう」という問いが新設された。ここでは「歴史の大きな流れ」と「説明する力の育成」が意識されている。

### (3) コラム等に関して

教育出版社では、コラムが「テーマ学習」という名で5種類設けられている。「郷土の歴史を探ろう」「地域から歴史を探ろう」「資料から歴史を探ろう」「世界から歴史を探ろう」「人物から歴史を探ろう」の5つである。このうち、前近代では特に前3者についての充実が図られているように思う。

まず、コラム「地域の遺跡や古墳を訪ねて」では、手引きの充実が見られた。具体的には、調べるべき項目が「小学校で学習した地域の人物」「地域の遺跡などの文化財」「地域に伝わる行事」「遺跡の発見などについての新聞記事」「歴史に関するテレビの特集番組」などのように例示され、また「博物館」「図書館」「インターネット」など調べ方の例示もなされた。同様の例は、コラム「地域の街道や港を訪ねて」にも見られる。同コラムでは地域調査の手引きが具体化し、「資料を読み解くときは展示や書籍の解説をよんでいつごろの何についての資料なのか確かめましょう」「絵の場合は、描かれている人々の服装や乗り物、建物、道具など色々なところに着目してみよう」といった着目点が例示されるようになった。このように、「身近な地域の歴史を調べる活動」という学習指導要領<sup>20</sup>を踏まえた改善がなされている。

また、学習指導要領は古代について「神話・伝承などの学習を通して、当時の人々の信仰やものの見方などに気付かせるよう留意すること」という指示を行っているが<sup>21</sup>、新版では、これに対応する記述が2ページにわたるコラム「神話に見る古代の人々の信仰」として新設されている。導入部分には「古代の人々は、身のまわりのできごとや自分たちが所属する社会についてどのように考えていたのでしょうか。『古事記』や『日本書紀』などに記された神話から、当時の人々の信仰やものの見方について探ってみましょう」とあり、建国神話にみる近隣諸国との共通性、死生観にみるギリシャ・中国との比較、神話の持つ虚構性と史料性などが話題とされている。他文化との比較が重視されているのは、学習指導要領が「我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深く関わっていることを考えさせるとともに、他民族の文化、生活などに関心をもたせ、国際協調の精神を養う」ことを歴史的分野の目標に掲げている<sup>22</sup>ことを意識したものと思われる。さらに、同コラムは「日本の各地には、『古事記』や『日本書紀』などの神話に登場する神々をまつる神社が多くあります。また、現在でも、神楽などの各地の伝統的な

行事のなかに神話に由来するものが残っています」「自分たちの地域の行事や文化財・地名などのなかにも神話とのつながりのあるものが残っているかもしれませんね。日本の神話のほかにも世界の神話についても調べてみましょう」として、出雲神楽の写真を掲げている。これは、同じく学習指導要領が目標とする「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察」<sup>23</sup>することを意識したものと考えられる。さらに「内容」の「(1) 歴史のとらえ方」のイには「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせる」という記述があり、その取扱いにあたっては「内容の(2) 以下とかかわらせて計画的に実施し、地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根差した伝統や文化に着目した取り扱いを工夫すること」とされている<sup>24</sup>。同コラムが古代の末尾に掲げられているのはこのためであろう。このように、同コラムは学習指導要領のいくつかの要素を同時に満たすべく構成されていると考えられる。

その他、「資料から歴史を探ろう」に属するコラムでも工夫が重ねられている。例えば旧版の「大名行列と江戸城」は、新版で「大名行列と藩の財政」に改題され、大阪城の図にかえて行列費用に関する藩歳出の円グラフが示された。大名行列の歴史的意義を理解させることに的を絞った結果、コラムの意義がより明確化したと言えよう。「地域から歴史を探ろう」に属するコラムでも、資料への着目が見られる。旧版「戦乱の世に自治を求めて」は、新版で「戦乱の世の自治と領国経営」に改題され、山城の国一揆に関する記述が削られた。かわって、北条氏康の「虎の印判状」に「禄寿応穩」の文字が書かれていることが紹介され、平和と生活の保障者としての戦国大名像を提示している。印文といった資料から読み取れることを具体的に示しているという点で、資料の多様性に関心を喚起する記述といえる。

このように新版では、主としてコラムにおいて、「地域の歴史」「国際関係や文化交流」「様々な資料を活用」といった学習指導要領の「目標」に対応する記述が見られる。

その他、稲作の西日本普及が前4世紀と明記され、足利義満が「日本国王」を名乗ったという記述が消えるなど、近年の研究動向に鑑みて修正されている点も散見された。

## 第5章 小括

以上、東京書籍・帝国書院・教育出版の3社の教科書について、構成および教育上の工夫に重点を置きつつ、新版での変更点を述べてきた。3社に共通する傾向として、以下の2点が挙

げられよう。

まず、3社ともに導入—まとめのプロセス、とくに「説明する力」の育成に意を注いでいる様子が見受けられた。その際、旧版で見られた発展的な問いかけが減退する一方で、導入—まとめがそれぞれ対応し、完結するような形での改訂が図られていた。また、学習者へのヒント提示や誘導を積極的に行ない、各項目、各時代ごとの学習課題を着実に理解させようとする姿勢が看取された。教員の側から見た時には、各項目を課題に沿う形で説明することが求められているのであり、課題に関わらない周辺的な知識についてはむしろ捨象していくことが必要だろう。項目ごとに発展的学習を提示する旧版に比べると、ポイントを絞れるので、かなり授業を組み立てやすくなっているといつてよい。こうした新版の教科書を十分に活用していくためには、毎授業時間における導入の時間とまとめの時間の確保が肝要である。特に生徒自身に説明させる機会が確保されねばならないが、生徒の説明に対して教員がフィードバックを与えることで、生徒への学習内容の定着度合いを高めていく必要があり、生徒の説明に即座に対応できるような授業準備を行っていかなくてはならないだろう。

次に、生徒の知的関心を刺激しつつ、地域に即して、あるいは資料に即して考えさせるような発展的学習は、各項目ごとではなく、学習のまとめ、あるいはコラム欄において行う方向へと3社ともに動いている。発展的学習にかけるべき時間が集中した分、教員の側では、これまでよりも準備に時間と手間を要することになる。学習指導要領が指摘するように「地域の特性に応じた時代を取り上げる」<sup>25</sup> 必要があるほか、近隣における博物館・図書館などの状況、校内におけるIT・通信環境などを踏まえて、生徒の関心や取り組みをサポートしていく必要がある。また、授業進行と発展的学習を関連させつつ、メリハリある授業構成にしていくためには、綿密な授業計画が必要とされる。教員の側の負担は大きくなるため、全てのコラムを一律に行うことは現実的ではない。発展的学習を集中的・選択的に行うことが肝要であり、どの項目を生徒に学ばせるかについての選択も重要になってこよう。各教科書は今回、調べ方や調査項目の例示などを強化しているが、その具体的な内容については、教員の裁量に委ねられている部分が多い。教員の腕が試される機会でもあり、積極的に取り組むべき課題と言えよう。

総じて、新版の利用に当たっては、学習課題を着実に身に付けさせる毎授業時間のとりくみと、時代を大観して考えさせるような発展的学習への教員独自の工夫という、タイプの異なる2種類の指導が要求されている。両者をいかに組み合わせるかによって、授業のバリエーションを豊かに広げていくことが可能であり、授業の計画・構成にこれまで以上に意を払う必要があると考える。

注

1. 「義務教育諸学校教科用図書検定基準及び高等学校教科用図書検定基準の一部を改正する告示」（平成26年1月17日文科科学省告示第2号）。この見直しは、直接的には2013年11月15日に発表された文科科学省の「教科書改革実行プラン」に沿ったものであるが、その背景には、「教科書検定基準を抜本的に改善」することを公約に掲げる与党の方針が存在している。
2. 「『中学校学習指導要領解説』及び『高等学校学習指導要領解説』の一部改訂について」（平成26年1月28日文科科学省通知, 25文科初第1159号）、および『中学校学習指導要領解説 社会編』（以下『解説』と略記する）82ページ。
3. 『解説』6ページ。
4. 『解説』11～14ページ。
5. 『解説』69～72ページ。
6. 『解説』70ページ。
7. 『解説』73ページ。
8. 『解説』75ページ。
9. 『解説』79ページ。
10. 『解説』82ページ。
11. 『解説』69ページ。
12. 『解説』13ページ。
13. 「江戸幕府の政治の特色を考えさせ、幕府と藩による支配が確立したことを理解させる」。『解説』78ページ。
14. 『解説』70ページ。
15. 三谷芳幸「弥生時代の区分が変わる？」（『週刊朝日百科 新発見！日本の歴史』50, 2014）等。
16. なお、古代では東アジア情勢を各事項の始めに移動させたり、「正倉院の宝物が語る大陸との交流」をコラム化するなど、東アジア情勢への留意が強く感じられる。
17. このコラムの中には「日本の領土と近隣諸国」も含まれており、「中学校学習指導要領解説」の一部改訂で求められた「領土に関する教育」への対応が図られている。
18. 『解説』69ページ。
19. 『解説』73ページ。
20. 『解説』68ページ。
21. 『解説』75ページ。
22. 『解説』68ページ。
23. 『解説』68ページ。
24. 『解説』70ページ。
25. 『解説』70ページ。